

〈論 文〉

ライフヒストリーの図式化の試み

——信仰の維持と離脱の過程——

猪 瀬 優 理

1. はじめにーライフヒストリーを比較する

本稿の課題は、ライフヒストリーの中でも宗教体験談に焦点を当て、これを統一モデリング言語、UML (unified modeling language) を用いて図式化し、比較することでどのような利点があるかを検討することである。

まず、本稿の構成を述べておこう。第一節となる本節では、ライフヒストリーを図式化して比較することの意義について述べ、第二節では UML を用いる利点について述べる。第三節では、宗教体験談を図式化する前提となる既存の入信・脱会理論について検討し、第四節では、具体的なライフヒストリー事例の紹介、第五節でそれらを UML によって図式化した例を示し、最後にこれらの比較から見える点について検討することで本稿の課題にこたえることとしたい。

ライフヒストリーは、『現代社会学辞典』(弘文堂 2012)において、「一般的には、個体の誕生から現在に至る全過程またその一部のことをさすが、社会科学や人文科学の領域では個人の人生や生活過程の全体像及びその経験の主観的意味から社会や文化の諸相や歴史変動を探求する質的研究法のことである」と説明される(桜井 2012: 1302)。

しかし、ライフヒストリーの定義にはその焦点の置き方に違いもみられる。宗教体験の分析にライフヒストリー法を用いている川又(2002: 16)は、「ある個人が時間的経過を踏まえ、自らの経験や社会について解釈した記録」として定義している¹⁾。藤間(2017: 261)は、ライフヒストリー研究法とは、「対象者による語りに、他者の語

りや他の資料を加え、研究者の問題関心に沿って再構成したうえで分析する方法」と定義している。

また、ライフヒストリーに類する調査法や分析法あるいはその成果物を指す概念は複数あり、特に近年は桜井厚や小林多寿子(桜井・小林 2005 など)の影響もあり、ライフストーリーという用語が多く使われるようになっている。

この中であえて『生活史宣言』(慶應義塾大学出版会)を出した有末(2012)は、ライフヒストリーとライフストーリーの違いについて、ライフヒストリーにおいては「事実に基づいた歴史性がやはり基調になっている」のに対し、ライフストーリーでは「個人が自分自身の人生を〈物語る〉ことが重要であって、事実であるかどうかもさることながら、当人の主観性にどのように刻印され、どのように〈物語られる〉かということが、最大の関心事になる」と述べている(有末 2012: 128)。

石川・西倉(2015: 2)は、ライフストーリー研究の再考を意図した編著の序章で「ライフヒストリー研究とライフストーリー研究で根本的に異なるのは、語りの位置づけである」とし、「ライフヒストリー研究は“何を語ったのか”に重点を置き、過去に起きたことの再構成に関心を寄せる」のに対し、「ライフストーリー研究は“いかに語ったのか”や“何のために語るのか”に問いをシフトさせ、語っている現在、およびそこから続く未来へと射程を広げた」と説明している。

先のライフヒストリーの定義の違いにおいて、川又はライフヒストリーを語る当人「自ら」の「解釈」に焦点を当て、藤間は「研究者の問題関

心」による再構成という点に違いがあったことは、以上の議論の展開に関連している。

ここで、ライフストーリー（ライフストーリー）研究における3つのアプローチの違いについて確認しておこう。すなわち、実証主義アプローチ、解釈的客観主義アプローチ、対話的構築主義アプローチである（桜井 2002）。

実証主義アプローチでは、既存の理論や概念枠組みから仮説が設定され、それを検証するためにライフストーリーが収集される。解釈的客観主義アプローチでは、多数のライフストーリーを収集して帰納的推論を重ねていくことによって、それらに通底する部分、つまり個人の主観を超えた社会的現実が見えてくると考える。これらの二つのアプローチにおいては、社会的事実とは一つであり、研究者が適切な方法を採用すればそれに到達できると想定している点が共通している。これに対して、ライフストーリー研究を行う研究者がとるのが、対話的構築主義アプローチである。研究者も含めた人々のやり取りを通じて社会的現実が構成されたと考え、ライフストーリーは、語り手と聞き手の対話の産物であるとしてとらえる。

対話的構築主義アプローチに基づくライフストーリー研究は、大きな影響を与えたが、疑問や批判も出されるようになった。特に、若手研究者によるこの方法の用いられ方には、「もとの方法論に含まれていた議論の複雑さや個別の文脈が捨棄され、いわばマニュアルとして「消費」されてしまった」との指摘があるようである（石川・西倉 2015: 9）。

なぜこのようなことが起きたのか。対話的構築主義は桜井自身の長年の調査経験の中で試行錯誤を繰り返しながら編み出した方法論を構築主義の視点で振り返って名付けられたものであるのに、初学者がそれを見抜けなかったために単なるマニュアルと受け取ってしまったのだという（石川・西倉 2015: 10）。

この課題に対しライフストーリー研究者たちは、方法論としてライフストーリー研究を捉えなおすことを試みている（石川・西倉 2015: 10-12）。先の有末（2012: 4）の問題意識もライフストーリー研究を「社会学の研究方法論」の問題と

してとらえるというところにあった。

本研究は以上の動きとは全く連動していないが²⁾、ある意味では、以上の課題に対しても貢献できる部分がある。

ライフストーリーを成果として提示するにはその「語り」を生き生きと描こうとすればするほど、言葉を尽くす必要があり、ライフストーリーのように聞き手も「語り」を構成する担い手であるという観点を重視すると、さらにその提示するべきデータ量は膨大になっていく。中堅以上の研究者であればその成果を著書などにおいて、多くの字数を自由に費やして、「厚い記述」のライフストーリーを提示することも可能かもしれない。しかし、若手研究者にとっては、その成果を示す場面は学会発表、雑誌論文など、時間や字数に限りのある媒体が主となってくる。そのために、ライフストーリーの提示の仕方についても一定の制約が出てしまうという側面もあるのではないだろうか。その点、UMLを用いてライフストーリーを図式化することが可能になれば、情報を縮約して伝えることが可能になる。

図に縮約してしまうことは、対話的構築主義の観点を無にってしまう、という見方もあるかもしれない。だが、UMLはモデリング言語であり、表現の道具である。どのように用いるかは、使用者次第である。様々なシステムを表記するために考案されたものであるので、聞き手と話し手の相互作用を図として表現することも可能と思われる。

また、これまでのライフストーリー研究においては、個別の事例は深く豊かに表現することはできても、それぞれのライフストーリーを比較するという点については、研究者の恣意的な解釈が入り込みやすいという問題点があった。この点についても、統一モデリング言語で表記することで、明確になる部分が大きいと考えられる。

宗教体験談をUMLで表現する前に、次節では、UMLについての簡単な説明を行うとともに、ライフストーリーの図式化にUMLを用いる利点について簡単に説明する。

2. ライフヒストリーの図式化に UML を用いる利点

UML とは、オブジェクト指向に基づくソフトウェア設計の標準表記法として定められた統一モデリング言語（図式言語）である⁽³⁾。主にソフトウェアの仕様化や図式化に用いられているが、現在では、ソフトウェア開発以外の業務分析等にも汎用的に利用されている。

オブジェクト指向とは、対象を構成するモノ（オブジェクト）を中心にとらえる考え方である。「オブジェクト」とは、物理的または概念的にまとまったモノ・コトを指す。概念化されたまとまりも「オブジェクト」とみなすので、目に見えないものもオブジェクトとして扱うことが可能である。オブジェクトは属性（データ構造）と操作（振る舞い）も持つ。そして、他のオブジェクトと関係を持ち、相手のオブジェクトから操作を引き出すことができるものととらえられる。

クラスは、オブジェクト指向の中でも重要な概念の一つであり、オブジェクトの属性や操作の共通性に着目して、オブジェクトを抽象化した概念である。たとえば、「サッカー」、「野球」、「テニス」、「卓球」、「柔道」、「剣道」といったオブジェクトを抽象化したクラスとして「スポーツ」を設定することができる。概念の構造にはいくつかの層があると想定することが可能であるが、クラスについても同様のことが想定できる。これを「継承」という概念で表現する。たとえば、「スポーツ」を上位クラス（スーパークラス）とすれば、「団体競技」「個人競技」、「球技」「武道」といっ

たクラスを下位のクラス（サブクラス）に設定することが可能である。

UML には 13 種類の図があり、それらの図を用いることによって、対象を様々な表現で可視化する。ただし、その仕様は膨大であるため、すべての仕様を理解することは現実的ではない。よく用いられる図は、ユースケース図、クラス図、相互作用図、ステートマシン図であり、表記する対象に合わせて利用する。

本稿では、ライフヒストリー、特に宗教体験談をプロセスとして表記することが目的であるので、13 種類の図の中からクラス図とステートマシン図を利用する。

クラス図は、オブジェクトの静的な情報・構造を表現する図である。対象を構成する重要な抽象的概念をクラス図として表現することになる。上記で述べたように、クラスには属性や操作の情報を表現でき、他のクラスとの様々な種類の関係についても表現することができる。例えば、「部員」というクラスのなかには、「田中さん」「鈴木さん」というオブジェクトが存在し、「部活動」というクラスの中には、「サッカー部」「卓球部」といったオブジェクトがある。

クラス図は、図 2-1 のように表記する。属性については型と初期値、操作については引数：型、戻り値の型も入力できるがこの項目は省略が可能なので、本稿ではこの部分は省略する⁽⁴⁾。可視性とは、属性や操作に対するアクセス可能範囲を定義する要素である。全部で 4 種類あるが、本論文では「+」（public：すべてのクラスからアクセス可能）と「-」（private：自クラスのみアクセス

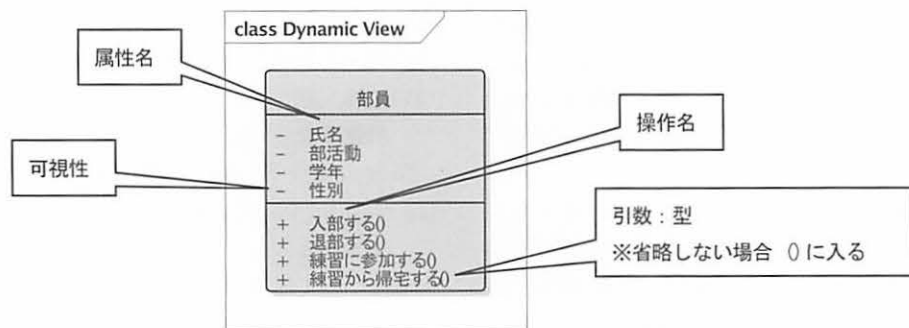


図 2-1 クラス図の例

可能)の二種類のみ利用する。

2つのクラスが何らかの関係を持っている場合は、関連として表すことが可能である。これを表現するには、2つのクラス間を線で結び、実践の中央部に「関連名」を設置する。ただし、本論文では1つのクラスのみを扱い、クラス間の関連については省略する。

ステートマシン図は、オブジェクトの状態変化を表現する図である。状態変化は、ある状態から別の状態への遷移で表現し、さらに遷移を起こす契機(トリガー)や遷移を行うかどうかの判断条件を表記することができる。ステートマシン図を描く目的は、システムやクラスの持つ状態とその振る舞いの関係を可視化し、状態と遷移の分析・設計を容易にすることであるから、本稿で扱うクラス「信仰者」のライフヒストリーを状態と振る舞いの関係として可視化し、その状態と遷移の分析が容易になることが期待される。

基本的な表記方法としては、たとえば湯沸かしポットの「待機中」の状態を表現した場合、図2

-2の通りであり、端的にそのクラスの状態を表現している。「開始疑似状態」は、黒く塗りつぶされた丸で表現された要素である⁽⁵⁾。これは、クラスの最初の状態を表す。「終了状態」は、内側が黒く塗りつぶされた二重丸の要素であり、遷移の終了を意味しているが、今回は用いない。

図2-3は、単純な状態の表記だけでなく、それに伴う処理を合わせて表記した図である。「entry アクション」は、状態に遷移した時に一度だけ実行される処理を指す。「exit アクション」は、状態から離れる直前に一度だけ実行される処理を指す。「do アクティビティ」は、状態にいる間、継続して実行される処理を指す。

「外部遷移」とはある状態から別の状態に遷移することであり、状態間を矢印で結ぶ。また、外部遷移は、「トリガ[ガード]/エフェクト」という構文で表記する。「トリガ」は遷移のきっかけとなる事象であり、「ガード」は遷移してもよいか判断するための条件である。「エフェクト」は遷移するときに実行される処理である。いずれも省略可能である。

複雑な遷移を行うと図が複雑になるので、このようなときは「状態の階層化」が有効である。状態を階層化させるときは、「コンポジット状態」と「サブ状態」を用いる。内部に状態を含む状態

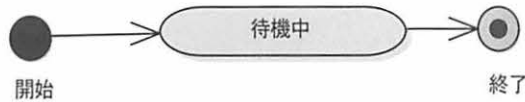


図2-2 ステートマシン図の例(1)

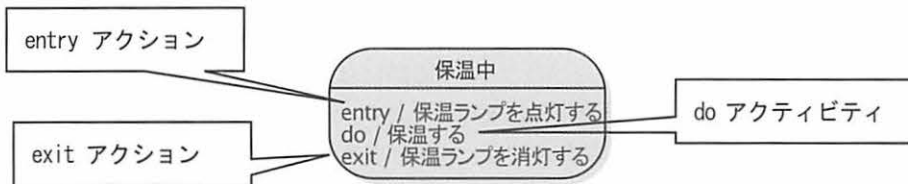


図2-3 ステートマシン図の例(2)

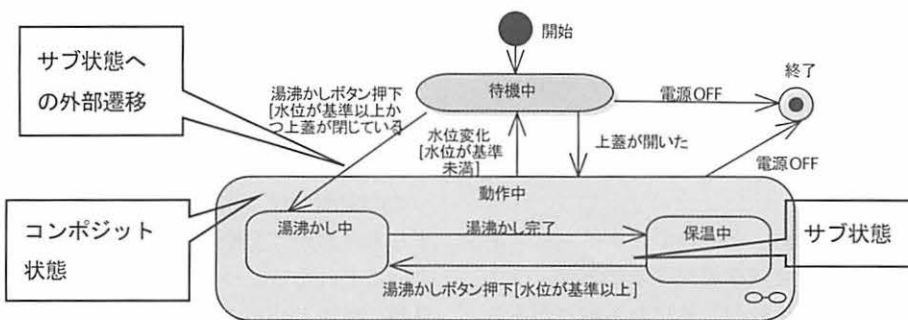


図2-4 コンポジット状態とサブ状態

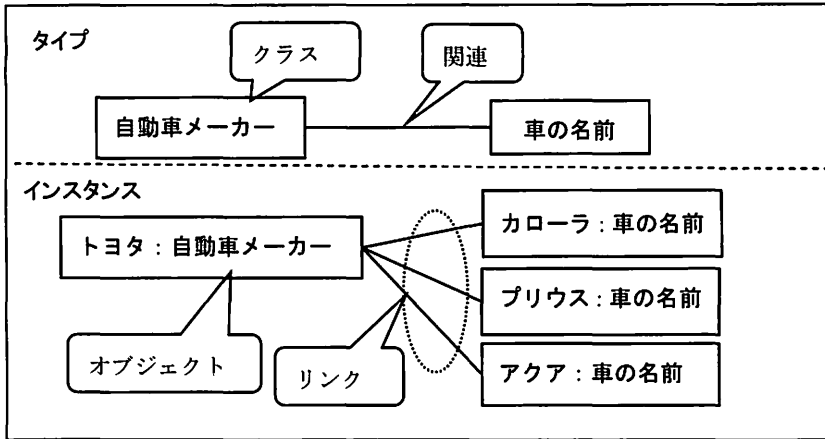


図 2-5 タイプとインスタンスの作図例

がコンポジット状態、コンポジット状態に含まれる内部の状態がサブ状態である（図 2-4）。

ほかにも用いることのできる表記法があるが、本稿では用いないため省略する。

UML では、モデルをタイプとインスタンスという二側面から管理している。タイプとはひな形となるモデル要素を指し、インスタンスとはタイプの具体例となるモデル要素を指す。例えば、タイプとしてとらえると、クラス「自動車メーカー」に対して関連を持つクラス「車の名前」という関係について、インスタンスの例をあげればオブジェクト「トヨタ」に対して、オブジェクト「カローラ」「プリウス」などが挙げられる、ということになる（図 2-5）。

つまり、タイプは抽象化した概念を用いて対象をモデル化したものであり、タイプには具体的なインスタンスが対応している。

このような具体と抽象の往復運動は、研究活動においては必須のものである。UML を用いることで抽象化した概念同士の関係を具体的な事例を明確に関連付けるだけではなく、図として表現することが可能になるため、具体的な事例に対しても比較可能な視点を見出しやすくなるという利点がある。

本稿では、この UML を用いて、ライフヒストリーの中でも宗教体験談を表記することで、ライフヒストリー同士の比較が容易になる利点があると考え、具体的にどのような点で明らかになるの

かを検討する。

次章では、まず、これまでの入信・脱会に関する理論を取り上げ、これらの理論がライフヒストリーを図式化するためにどのように利用可能か、という観点から整理し、それらの議論をもとに UML で表記するための準備を行う。

3. 入信・脱会に関する理論

宗教体験談とは、宗教にかかわった体験を語ることであり、教団内では「おかげばなし」「信仰体験」などと呼ばれ、信仰を持つことによって得られた「功德」について語る「語り」が一般的である。信仰によって「おかげ」「功德」が得られる際には、多くの場合「苦難」「困難」が先行しており、その「苦難」「困難」を乗り越える「物語」の重要な要素として「信仰」「宗教」が登場するのが「宗教体験談」である。このような「苦難」「困難」はその人の人生にとっても重要な局面を占めており、「宗教体験談」の多くはライフヒストリーとしての構造を持っている⁽⁶⁾。

ただし、本稿では宗教体験談を、「自分自身の人生を「宗教」「信仰」という観点から語るスタイルのライフヒストリー」として定義する。

この定義では、宗教体験談で語られることは必ずしも「おかげ」や「功德」の話に限らなくてもよいことになる。つまり、宗教や信仰との対立や葛藤、離脱といった物語も、宗教体験談に含められる。入信の物語は教団内などでは多く語られ、

研究もある程度蓄積されているが、脱会に関する研究については例が少ない。インターネット環境の整備によって、全国に散らばっている脱会者同士がコミュニティを形成しやすくなっている状況があるが、このようなコミュニティでは互いに脱会の物語を語ることが、その経験によって受けた苦しみや痛みを癒すことに大きな役割を果たすことがわかっている（猪瀬 2002, 2009）¹⁷⁾。

本稿の課題は、ライフヒストリーを UML によって図式化し、それを用いて比較を試みることである。今回はこの比較のポイントとして、教団と信者との関係性について焦点を当てる。具体的には、同じ教団に同様な形で関わりを持った人物が、その教団との関係を異なる形で結ぶことに至る分岐点がどこであるのかを示唆する要素が何かを探ることとしたい。

第四節で示す事例は、同じ教団、同じ年齢層、同じ性別の二世信者の事例を 3 例提示している。しかし、彼女らの教団とのかかわり方はそれぞれ異なっている。一人は教団から離脱し、一人は教団との関係を大きな変化なく維持し、もう一人は教団との関係を非常に強める経験をしている。ライフヒストリーの図式化によってその違いを分けるポイントが見えやすくなるかどうかを検討したい。

それに先立って、これまでの信者と教団との関係について論じている先行研究をいくつか紐解き、その関係性を捉える要点について整理しておこう。

まず、入信理論として著名な「ロフランド＝スタークモデル（以下、L-S モデル）」である。このモデルは、特定の教団への入信者の入信理由や入信プロセスを検討するために作成されたが、多くの入信研究に引用されるモデルとなっている。具体的な内容は、以下のとおりである（Lofland and Stark 1965 : 874）。

- (1) 何らかの持続的な激しい緊張 (tension)
- (2) 宗教的な問題解決の視点 (religious problem-solving perspective)
- (3) 宗教的な探究者 (seeker) としての自己の位置づけ

- (4) 人生の転機 (the turning point) での特定宗教との出会い
- (5) 特定の宗教集団との感情的紐帯 (affective bond) の形成
- (6) 宗教集団外の人間関係との感情的紐帯の薄れ (neutralize)
- (7) 宗教集団との集中的な相互行為 (intensive interaction)

このモデルはプロセスモデルであり、7つの相互に依存する要因が累積して最終的に入信に至るとする。はじめの 3 つの条件が入会する宗教に接触する以前から存在する背景的要因であり、残りの 4 つは信者になろうとするものと教団との間で生じる状況的要因である。このモデルには、その後の研究で他教団に当てはまらない、客観的な検証は不可能との指摘など批判的な検討がなされており、提唱者のうち一人はこのモデル自体を放棄しているが、入信を理解するための多元的な要因が組み込まれているため、多くの研究で参照されてきた。上記の 7 つの条件は入信プロセスにおいて必要不可欠な要素ではなく、必ずしも累積的な性質を持たないが、信者の生活史を究明するうえで、的確なチェックポイントを提示しているという評価はなされている（伊藤 1998 : 169）。

また、グロックの剥奪理論（Glock 1965）においては、経済的剥奪、社会的剥奪、有機体的剥奪、倫理的剥奪、精神的剥奪の 5 つの種類の剥奪が生じたとき、その剥奪からの回復を求めて、人々は宗教を含めた社会運動に参加すると説明される（Glock 1965 : 246-248）。

入信理論に「人間を受動的な存在としてとらえる伝統的パラダイム」と、「行為者の能動的な側面を強調する新しいパラダイム」という 2 つのパラダイムがあるとしたりチャードソン（Richardson 1985）によれば、剥奪理論は、人間を受動的にとらえる伝統的パラダイムにおける議論である。伊藤（1998）は、この二つのアプローチの統合を試みる中で、先の L-S モデルの再評価を行っている。伊藤（1998）の目的は「入信プロセスを包括的に理解する理論枠の確立」であったが、その新しいモデルの確立には至っておらず、「信

者を探究者としてとらえる視点を分析枠の中を含める」ことの必要性を指摘するにとどまっている。

次に、脱会に関する理論についても触れておこう。ライトは自発的脱会を促す条件を以下の4つにまとめている (Wright 1984: 176)。

- (1) 宗教集団外の社会との結びつきの回復
- (2) 教団内で親密な人間関係 (対関係) の形成が制限されないこと
- (3) 世界を変革できないことを認識すること
- (4) 指導者の行動と理念の間の矛盾に気づくこと

この4つの条件は、先の L-S モデルの裏返しといえる。ライトの第1条件は、L-S モデルの5の条件「特定の宗教集団との感情的紐帯の形成」が失われ、6の条件「宗教集団外の人間関係との感情的紐帯の薄れ」が回復されたことを意味する。ライトの第2条件は、L-S モデルの「宗教集団との集中的な相互行為」と矛盾するようにも思われるが、拘束度が高い教団においては、教団内における親密な関係の形成を制限して、教団に対する不満を表出したり共有させたりしないことで脱会を防ぐ手立てとしていているところがある。教団との相互作用の中には、教団との結びつきを強めるものも弱めるものもあるのである。

ライトの第3条件と第4条件は、「宗教的な問題解決の視点」、「宗教的な探究者としての自己の位置づけ」に亀裂が入り、もはやその宗教では問題が解決できず、宗教的な探究者としての自己像も維持できなくなった状態を指している。これによって、少なくとも現在所属している宗教集団に居続ける理由が失われることになる。

さらに、ライトら (Wright and Ebaugh 1993: 119-120) は、離脱の在り方について3つの類型を提示している。

- (1) 感情的離脱 (disaffection): 教団の人間関係に愛情不足を感じて距離を置く状態
- (2) 認知的離脱 (disillusionment): 教団の提示する「世界観」に不信を持ち他の代替的

「世界観」を必要とする状態

- (3) 組織的離脱 (disaffiliation): 教団の組織的活動への参加をやめた状態

この類型は、離脱は一挙に生じるのではない段階を踏んだプロセスであり、人々とある組織とのつながりは目に見える物理的なものにとどまらず、複数の次元があることを示している。脱会のプロセスについては、ジェイコブ (Jacobs 1989: 126-132) によって、宗教集団との結びつきの切断、カリスマ的リーダーとの結びつきの切断、(宗教) 運動からの総合的な分離と社会的リアリティの再定義という3つのステージとして提示されている。

このように、入信・脱会の過程は「自己と意味体系の根本的変容」と捉えられ、「個人の意味体系は、初期の社会化と人生全体を通じての他の信者との相互交流を通して、社会的に獲得され支持される。個人が意味体系を変えれば、それは社会的相互交流を通じてである。そして、意味体系とそれを支える集団へのコミットメントを促す過程は、根本的には社会的な過程」である (マクガイア 2008: 153)。

本稿では、自ら入信した信者ではなく、二世信者の事例を取り上げる。二世信者にとっても、個人の人生における重要な社会的諸要因 (進学や就職、結婚や転居など) は、他者との相互交流を高める機会でもあり、個人的意味体系を変容させる機会ともなりうる。そこで、以下の事例では、教団内外の「社会的相互交流」の観点に注意して事例を検討する。

比較という観点を生かすため、以下では二世信者の信仰継承を離脱・維持・強化の三つのパターンとして整理してとらえる。「離脱」とは、所与の信仰を失って、その教団や信仰から感情的・認知的・組織的に離れてしまうことを指す。「維持」については、所与の信仰を大きな変化なく、その教団との関係を継続することを指す。「強化」は、所与の信仰を本人が自分の信仰として再獲得し、さらに活発にすることを指す。「強化」の事例は、いわゆる「入信」の過程に類似する可能性が高いだろう。

4. ライフヒストリー事例

この節では、離脱の事例としてAさん、維持の事例としてBさん、強化の事例としてCさんを取り上げる。3名とも女性であり、親世代以上が同じ教団の信仰を持つ家族に育ったこと、インタビュー当時は30歳代であったことは共通している⁸⁾。信仰の受け止め方の経過の違いを簡潔なライフヒストリーとして再構成して提示する。なお、個人の特定を避けるため、部分的に事実を変え、あいまいに表記している部分がある。

4-1. 離脱の事例

Aさんの家は祖父母の代からの信者であり、両親とも信者である。

物心つくころには、自分の家には他の友達の家にはない「信仰」があることに気が付いていた。小学校入学以降は、「家族の信仰は正しい、特別である」という誇らしい思いもあったが、胸の内では、その宗教の教えを、他の家族ほど心から信じていることができないという焦燥感があった。また、信仰を持っていることは、友達の家とは違っているという認識もあったため、教団のことを知らない学校の友人には知られたくないという思いも持っていた。

高校に進学する時、教団の教えを信じられる自分になりたい、教団系列の学校に進学すれば、「正しい」信仰心が得られるのではないかとの思いから、自ら希望して教団系の高校に進学することに決めた。親は、子どもが教団系列の学校に入学することについてはそれほど強い希望は持っていなかったもので、自分の意志である。教団系列の学校が持っている「力」が自分の信仰を強めてくれるのではないかという可能性に期待していた。

しかし、入学後、教団系列の学校に失望する。学校は、「信仰」を前提に動いており、自分が他の生徒とは同じような信仰を持てないことを再確認する結果となった。

そして、教団系列ではない大学へ進学する。大学では、学生が所属する組織に入り、教団活動をそれなりに行うようになった。この時の仲間との活動は楽しく感じる面もあった。

しかし、大学院受験のためなどの理由により、活動を控えたいと先輩信者に申し出たところ、大変な時にも活動を休まずにしようという気持ちを持てず、熱心に活動できない姿勢を責められ、ショックを受け、苦しむことになった。

そのような辛い気持ちの中、大学構内を歩いていたところ、不意に「誰も自分が苦しむことを望んでいない」という気づきを得ることとなった。そして、家族にも「信じていない」ことを表明することを決心し、家族には十分に理解されたとは言えないが、教団から距離をとることを伝え、実行することができた。

その後、大学院に進学するなどして、教団の教えとは異なる、他の考え方を持つ人や、自分自身の考え方を認めてくれる人たちと出会い、自分にとっては離れてよかったと感じられるようになっている。

4-2. 維持の事例

Bさんの母親がこの教団の信仰を持った第一世代である。両親とも信者だが、父は信仰活動に熱心とは言えない。

Bさんは子どものころから、母親に信心の大切さを教えられており、自分自身も小さなことでも祈り、願いが叶うという経験を積み重ねてきた。例えば、遅刻しそうな時に祈ると信号がすべて青になって、時間をロスしないで済んだなど小さな功德がたくさんある。そのため、自分の親から教えられた信仰を疑ったことはない。

高校の進学先を決める時、Bさん自身は教団系列の学校に行きたいと願った。教団のために役立つ人材になりたいという思いがあった。親元を離れることになるため、父親の反対を受けた。何とか受験は許してもらったが、不合格となったため、別の宗教系の学校に進学した。父親は不合格になって喜んでしたが、自分自身は、非常に不本意で、教義の通り真剣に祈ったのに叶わなかったという思いを持った。

しかし、地元の高校に進学したおかげで、余分な生活費や学費がかからなかったため、念願の海外留学をする機会を得られた。父親はもちろん心配して反対していたが、教団系列の学校に通えな

かったこともあったので、許してくれた。教団系列の学校に進学していれば父親に留学を許可されなかったもので、別の形で自分の祈りがかなえられた、と思った。一番自分にとっていいことをしてくれる信仰なのだと再認識した。

その後は、希望の通り、語学力を生かした職に就き、教団の活動では国際化にも貢献している。留学で培った語学力を通じて、教団への奉仕も欠かさない信仰生活を送っている。

自分の家族が幸せなのは、母が信仰しているおかげだとの思いがあるので、自分が結婚する時にも同じ信仰の人と結婚したいと考えている。

4.3. 強化の事例

Cさんは、祖父母の代から当該教団の信仰を持っている家族に育った。両親とも信者であり、派手ではないが、しっかりした信仰を持っている。

子どものころから親が祈っている姿は見えていたが、自分自身が熱心に祈るというほどでもなかった。

そして、小学校の時に難病にかかる。長期の入院生活を余儀なくされ、義務教育はほとんど通えなかった。学校に行ける時があっても、窓から運動をしているほかの子どもの姿をうらやましい思いで見つめていたことを覚えている。とはいえ、元来が話好きの性格なので、病院では他の入院患者と仲良くなり、その人の病室に遊びに行くなどして、楽しく過ごしているところもあった。

だが、足が不自由で自由に動けず、勉強もしていないので、高校に進学できなかった。自分がこのようなことになってしまった以上、信仰の力は感じなかった。むしろ、信仰をしても何にもならない、と不信感を持っていた。両親は、自分のために祈るだけでなく、さまざまな民間療法も試してくれたけれど、何も効果がなかった。

19歳の時、ただ一人、何もすることもなく家にいるしかない状況で、自分が無力に感じ、「家族のお荷物」になっているとの思いを持った。しかし、その思いをぶつける先がどこにもないので、主に母親を相手に家庭内で暴れることも多かった。母親が陰で泣いていることも知っていたが、自分にはどうにもできなかった。

そんなとき、母親から「本山にお参りに行くことを目標に、長時間の祈りを行おう」と提案される。自分がこんなに苦しんでいるのにそんな提案をしてきたことに怒り、何も起こらなかつたら貰めてやろう、どんな言葉でなじつてやろうか、という意地の悪い気持ちで祈り始めた。ところが、祈り始めて15分もしないうちに涙があふれ、親への感謝がわいてきた。自分の足は思うように動かないけれども、何か前向きにやってみようという気持ちが出てきた。

この祈りを機に、自分の身体や社会的な状況は変わっていないのに、自分の気持ちが全く反対に変わった。「これが信仰の力なのだ、すべて自分の心次第なのだ」、と納得することができ、この短い時間の間に自分はすっかり生まれ変わっていた。

この祈り以降、毎日たくさん祈り、1年後には、目標通り家族と一緒に本山登山も実現することができた。また、一生歩けないといわれていたのに、手術を受けて松葉杖を用いれば自力歩行ができるようになった。無理だと思っていた運転免許も取得し、自分で自由に教団活動にも行けるようになる。少しではあるが、賃金を得る仕事もできるようになった。

いまでは、この信仰体験をより多くに伝えていくことが使命だと信じて、自分の体験談を多くの人に語る活動をしている。教団のさまざまな会合に呼ばれて体験談を話すだけでなく、病院で知り合った友人たちにもこの信仰の素晴らしさを伝え歩いている。

5. UML を用いた事例の図式化

UMLは世界で活用されているものの、ライフヒストリーを表記することに用いられた例はない。そこで科学研究費による研究の取り組みとしてメンバーによる討議を重ね、プロトタイプとしての「信仰者」のクラスを作成した(図5-1)。

信仰者のクラスの「属性」は4つ挙げられている。「外的存在への認識」は信仰者の教団内外の関係者への認識、「気分・意識状態」は信仰者の宗教的気分・意識、「教義へのコミットメント・得心」は信仰者の教義に対する認識、「自己認識」

は信仰者の宗教の観点から見た自分に対する認識のありようを指している。いずれも外部から見てもわからないので「可視性」は Private (－) である。信仰者の振る舞いを意味する「操作」は、「教義を学ぶ」「教義を実践する」「激しい体験をする」「実現のため注力する」の4つを設定している。

以上の「信仰者」の「属性」と「操作」は、第3節で示した入信・脱会論と科研メンバーが接してきた宗教体験談の事例をもとにして設定されている。しかし、これはあくまでもプロトタイプであり、どのような宗教体験談の分析にとっても必要十分の「信仰者」としての「属性」と「操作」

を備えているとは限らない。今後、分析や検討を重ねることによって、より適切な使いやすいのへと修正する必要がある。本稿において図5-1のクラス図を用いて分析を行うことは今後の改善への第一歩である。

なお、宗教体験談を分析するためのクラス図としては、図5-2のように「信仰者」にかかわりをもつ関係者との関連を示した図も作成した。しかし、こちらは互いのクラスの間の関係性に関する問題など、さらに精査が必要であるため、今回は用いない。

離脱事例であるAさんのライフストーリーは以下のように示した(図5-3)。Aさんの教団など「外的存在への認識」は、最終的な「離脱」に至るまではアンビバレントなものである。また、「気分・意識状態」については大きな変化は見られないが、「離脱してもよいのだ」という気付きを得たときには、宗教的な要素も含む高揚した感覚を得ていたと思われる。「教義へのコミットメント」については、教団系列の高校で学んでいる期間と大学で教団活動をしていた時期には強くなっているが、それ以外は低い。「自己認識」については、「離脱」に至るまでは「信仰を持ってない」という点で低いものだった。信仰を通した「願望の実現」は経験していない。

維持事例であるBさんのライフストーリーは

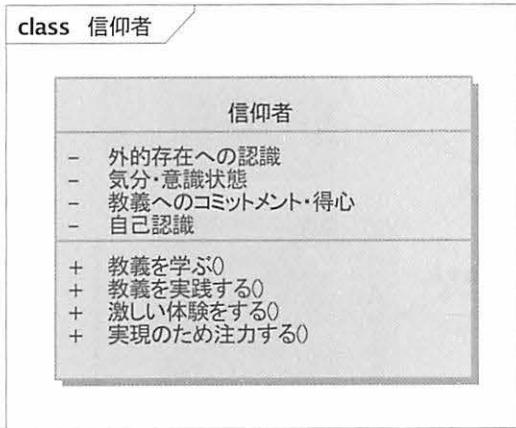


図5-1 信仰者のクラス図

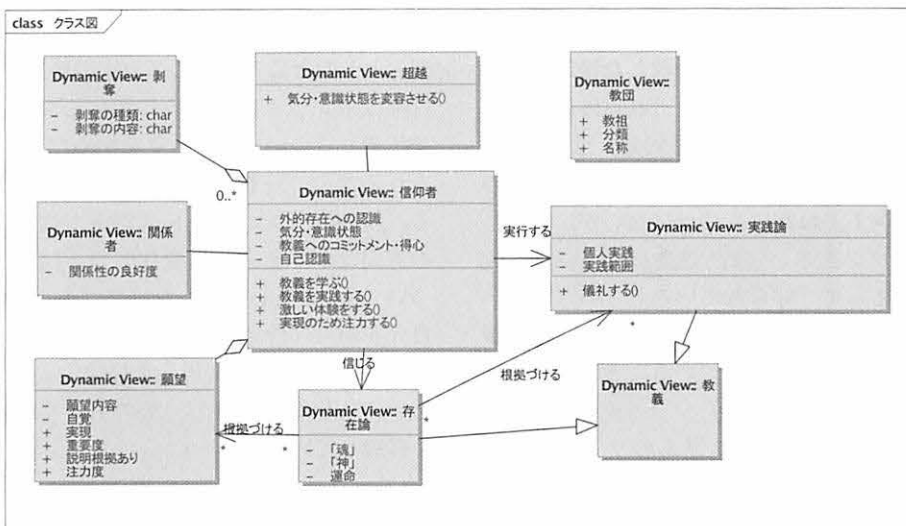


図5-2 宗教体験談のクラス図

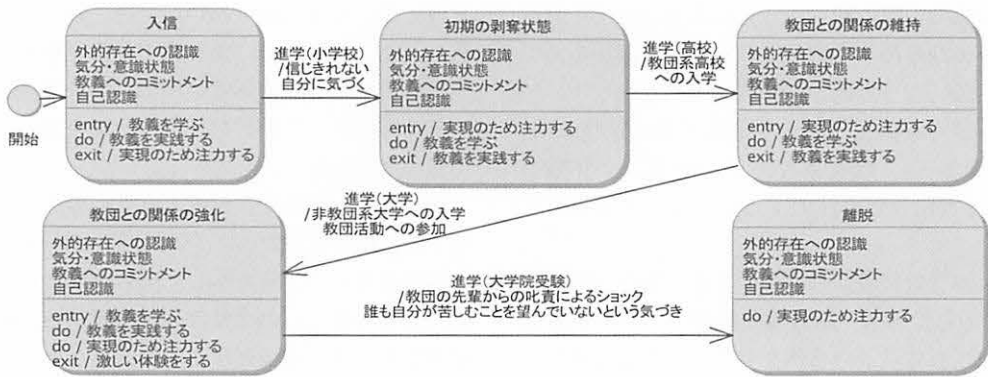


図 5-3 離脱事例：A さんのライフヒストリー

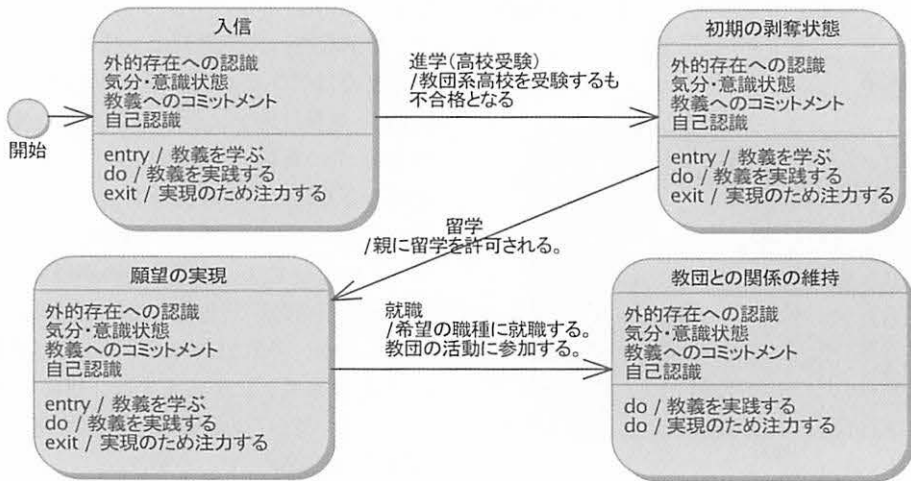


図 5-4 維持事例：B さんのライフヒストリー

以下のように示した（図 5-4）。B さんの「外的存在への認識」は高校入試に失敗した後は一時期ネガティブなものになったが、それ以外は一貫してポジティブなものである。「気分・意識状態」については大きな変化は見られない。「教義へのコミットメント」は高いものではないが、一貫してポジティブである。「自己認識」についても教団の信仰によって「守られている」というポジティブなものが全体を通して継続されている。「願望の実現」という経験を経ていることがポイントである。

最後に強化事例である C さんのライフヒストリーを以下のように示した（図 5-5）。C さんの「外的存在への認識」は病気が治ることなく、家に閉じこもっていることを余儀なくされていた時

期にはネガティブなものであるが、図で「発心・転」としたところで初めて自己の意識が変化し以降はポジティブなものに変化した。「気分・意識状態」については、祈りを始めたときに涙があふれるなど、一種の宗教的高揚状態に至っている。「教義へのコミットメント」は「発心・転」の意向はポジティブに変化した。「自己認識」についても、「発心・転」を経て「お荷物であった自分」から「使命を持った自分」へと大きく変化している。「願望の実現」を経験する前に「堅信」といえる状態を経験し、そのあと「願望の実現」を経験している。

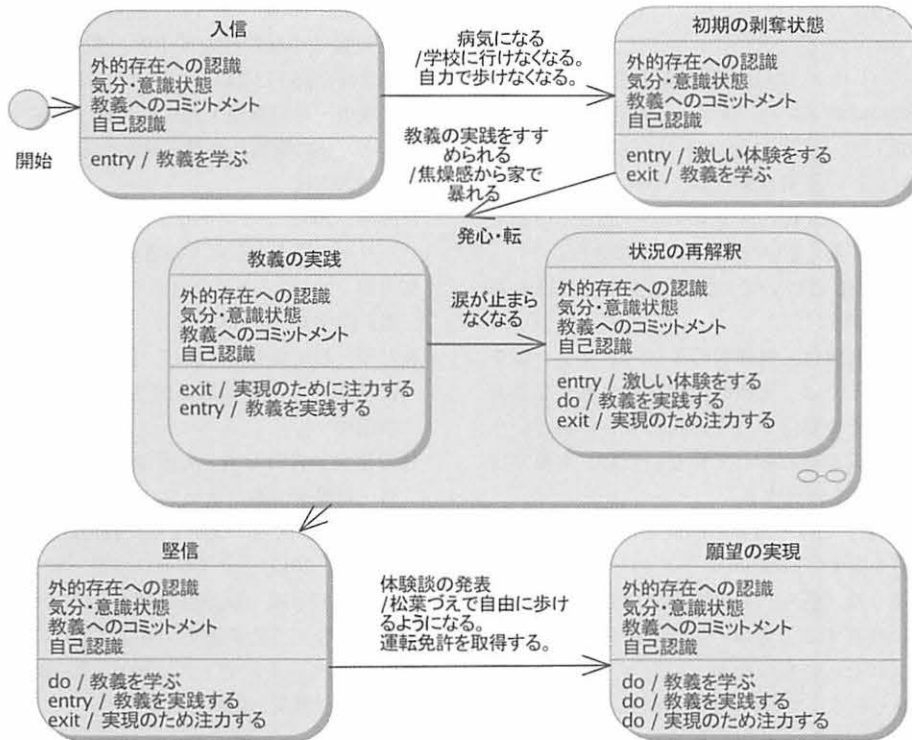


図 5-5 強化事例：C さんのライフストーリー

6. まとめと考察

以上の図の比較の結果をまとめる。

離脱事例の場合は、信仰をネガティブにとらえる状態が連続して生じていること、確かな形で「願望の実現」という状態を経験していないことが明確である。維持事例の場合は、信仰をネガティブにとらえる状態はあっても連続はせず、大きなものではなくても「願望の実現」など信仰をポジティブにとらえる状態が生じていることで、信仰を維持している。最後に、強化事例の場合は、信仰の実践によって、自己認識、外的存在への認識が大きく変容する経験を経ていることが明確に示された。その結果、「願望の実現」をする前に「堅信」状態に到達している。

今回の分析では、離脱・維持・強化を分ける要因の一つとして、教義の実践を通じた「願望の実現」という状態を自己認識や外的存在への認識をプラスにさせる形で経験しているかが重要なポイントとして挙げられる。UML を用いることで、

この違いを図として明確に示すことができた。

また、二世信者の離脱・維持・強化のライフストーリーを、UML を用いて信仰に対する状態のステートマシン図として描き出したことによって、信仰の状態を変化させるトリガとして、進学、就職、病気の罹患・平癒などが明確に示された。

本稿における UML によるライフストーリー図式化の試みにはまだ不十分な点もあるが、この表記法をライフストーリーに用いる一定の有効性を示せたと考えられる。

謝辞

本研究は、科学研究費挑戦的萌芽研究（課題番号 15 K 13069：代表者川端亮）「ライフストーリー法の革新－UML による記述－」による研究成果の一部である。

注

- (1) この定義は川又俊則・寺田喜朗・武井順介編、2006、『ライフストーリーの宗教社会学－紡がれる

信仰と人生」(ハーベスト社)でも用いられている。

- (2) 2017年11月4日の日本社会学会学術大会では、本研究の科研のメンバー4名(川端亮、渡辺光一、河野昌広)で「ライフヒストリー図式化の試み(1)~(4)」という発表を行い、小林多寿子氏の司会のもと、有末賢氏にもフロアに参加していただき、貴重なご意見をいただくことができた。
- (3) 以下のUMLについての説明は主に竹政ほか著(2013)を参考にした。
- (4) 属性の初期値は、信仰者のステートマシン図を作成するうえでは、属性の変化を示す重要な要素であるが、その変化をどう表記していいかという点で十分議論が詰められていないため、本稿ではこの点は言葉で補足する。
- (5) 「疑似状態」とは、遷移の制御を行うための疑似的な状態を表す。
- (6) このような「語り」を教団内で発し、教団仲間とともに共有することは、信仰共同体を形成・維持するプロセスにもつながっており、教団組織について論じるうえでも、「宗教体験談」は重要な要素であるといえる。
- (7) 多く語られることがない宗教体験談のなかでも、脱会の体験は特に語られにくい隠れた物語だといえる。
- (8) ただし、インタビューを実施した年については、2004年から2011年と幅がある。個人の特定を避けるため、インタビュー実施年について明記はしない。

参考文献

- 有末賢, 2012, 『生活史宣言—ライフヒストリーの社会学』, 慶應義塾大学出版会
- 石川良子・西倉実季, 2015, 「序章 ライフストーリー研究になにができるか」, 桜井厚・石川良子編, 2015, 『ライフストーリー研究に何ができるか: 対話的構築主義の批判的継承』新曜社, pp.1-20
- 伊藤雅之, 1998, 「入信の社会学—その現状と課題」『社会学評論』48巻2号 pp.158-176
- 猪瀬優理, 2002, 「脱会プロセスとその後」『宗教と社会』8号, pp.19-38

- 猪瀬優理, 2009, 「第3章 脱会過程の諸相」, 櫻井義秀編『カルトとスピリチュアリティ』ミネルヴァ書房, pp.113-143
- 川又俊則・寺田喜朗・武井順介編, 2006, 『ライフヒストリーの宗教社会学—紡がれる信仰と人生』, ハーベスト社
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 桜井厚, 2012, 「ライフヒストリー」『現代社会学辞典』弘文堂, p.1302
- 桜井厚・石川良子編, 2015, 『ライフストーリー研究に何ができるか: 対話的構築主義の批判的継承』新曜社
- 竹政昭利・林田幸司・大西洋洋・三村次朗・藤本陽啓・伊藤宏幸著, オージス総研監修, 2013, 『かんたん UML 入門 改定2版』技術評論社
- 藤間公太, 2017, 「ライフヒストリー研究法から家族研究への示唆: 政治性の観点から(有末賢教授退職記念号)」『法学研究』90(1), pp.261-282
- マクガイア, メレディス, 2008, 『宗教社会学』, 明石書店(翻訳 山中弘ほか)
- Jacobs, Janet. L, 1989, *Divine Disenchantment: Deconversion from New Religion*, Indiana Univ. Press
- Lofland, J, and Stark, R., 1965, "Becoming a World-Saver: A Theory of Conversion to a Deviant Perspective", *American Sociological Review*, 30, pp.862-875
- Glock, C, 1965, "On the Origin and Evolution of Religious Groups", Glock and Stark, *Religion and Society in Tension*, Rand McNally, pp.242-259
- Richardson, James T. 1985. "The Active vs. Passive Convert: Paradigm Conflict in Conversion/Recruitment Research." *Journal for the Scientific Study of Religion*, 24(2), pp.163-79
- Wright, S. A, 1984, "Post-involvement Attitudes of Voluntary Defections from New Religious Movements." *Journal for the Scientific Study of Religion*, 23(2), pp.292-298.
- Wright, S. A, Ebaugh, H. R., 1993, "Leaving new religions", *Religion and the Social Order*, Volume 3 B, pp.117-138